

令和3年度 学力検査問題 数学 解答

1

$$(1) x \geq \frac{1}{10} \Leftrightarrow \log_{10} x \geq -1 \dots\dots ① \quad y \geq \frac{1}{10} \Leftrightarrow \log_{10} y \geq -1 \dots\dots ②$$

$$x^2 y = 10 \Leftrightarrow 2 \log_{10} x + \log_{10} y = 1 \dots\dots ③$$

③ より $\log_{10} y = 1 - 2 \log_{10} x \dots\dots ④$ なので, ④, ② より

$$1 - 2 \log_{10} x \geq -1 \Leftrightarrow \log_{10} x \leq 1 \quad \text{これと ① より } -1 \leq \log_{10} x \leq 1$$

また, ③ より $\log_{10} x = \frac{1}{2}(1 - \log_{10} y)$ なので, これと ① より

$$\frac{1}{2}(1 - \log_{10} y) \geq -1 \Leftrightarrow \log_{10} y \leq 3 \quad \text{これと ② より } -1 \leq \log_{10} y \leq 3$$

答 $-1 \leq \log_{10} x \leq 1, \quad -1 \leq \log_{10} y \leq 3$

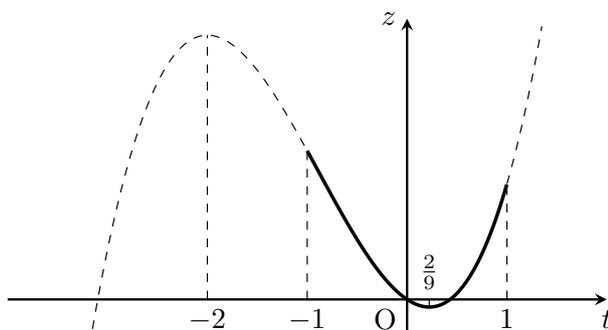
(2) $z = -4(\log_{10} x)(\log_{10} y) + 3(\log_{10} x)^3$ とおく。④ を代入して,

$$\begin{aligned} z &= -4(\log_{10} x)(1 - 2 \log_{10} x) + 3(\log_{10} x)^3 \\ &= 3(\log_{10} x)^3 + 8(\log_{10} x)^2 - 4 \log_{10} x \end{aligned}$$

よって, $\log_{10} x = t$ とおくと, $z = 3t^3 + 8t^2 - 4t \quad (-1 \leq t \leq 1) \dots\dots ⑤$

$\frac{dz}{dt} = 9t^2 + 16t - 4 = (9t - 2)(t + 2)$ なので, ⑤ の増減表およびグラフは次のようになる。

t	...	-2	...	$\frac{2}{9}$...
$\frac{dz}{dt}$	+	0	-	0	+
z		↗		↘	



ここで, $t = -1$ のとき $z = 9$ であり, $t = 1$ のとき $z = 7$ である。

よって, z は, $t = -1$ のとき最大値 9 をとる。

ここで, $t = -1$ となるのは $\log_{10} x = -1, \log_{10} y = 3$ のとき, すなわち $x = \frac{1}{10}, y = 1000$ のときである。

また, z は, $t = \frac{2}{9}$ のとき最小値 $z = 3\left(\frac{2}{9}\right)^3 + 8\left(\frac{2}{9}\right)^2 - 4 \cdot \frac{2}{9} = \frac{8 + 96 - 216}{243} = -\frac{112}{243}$

をとる。ここで, $t = \frac{2}{9}$ となるのは $\log_{10} x = \frac{2}{9}, \log_{10} y = \frac{5}{9}$ のとき, すなわち

$x = 10^{\frac{2}{9}}, y = 10^{\frac{5}{9}}$ のときである。

答 $\begin{cases} \text{最大値 } 9 & \left(x = \frac{1}{10}, y = 1000\right) \\ \text{最小値 } -\frac{112}{243} & \left(x = 10^{\frac{2}{9}}, y = 10^{\frac{5}{9}}\right) \end{cases}$

2

(1)

点 D を原点とし、 \vec{DC} , \vec{DA} , \vec{DH} がそれぞれ x 軸, y 軸, z 軸の正方向となるように、 xyz 座標を定める。このとき、

$$\vec{DP} = (1, \sqrt{3}, 0), \quad \vec{DQ} = (\sqrt{3}, 0, \alpha)$$

ここで、 $\angle PDQ = \theta$ とすると、

$\triangle DPQ$ の面積 S は

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} DP \cdot DQ \sin \theta = \frac{1}{2} DP \cdot DQ \sqrt{1 - \cos^2 \theta} = \frac{1}{2} \sqrt{DP^2 \cdot DQ^2 - (DP \cdot DQ \cos \theta)^2} \\ &= \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{DP}|^2 |\vec{DQ}|^2 - (\vec{DP} \cdot \vec{DQ})^2} \quad \dots\dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

となる。ここで、 $|\vec{DP}|^2 = 1^2 + (\sqrt{3})^2 + 0^2 = 4$, $|\vec{DQ}|^2 = (\sqrt{3})^2 + 0^2 + \alpha^2 = \alpha^2 + 3$,
 $\vec{DP} \cdot \vec{DQ} = 1 \cdot \sqrt{3} + \sqrt{3} \cdot 0 + 0 \cdot \alpha = \sqrt{3}$ なので、これらを $\textcircled{1}$ に代入して、

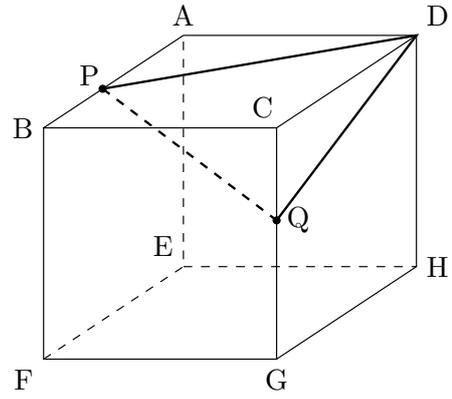
$$S = \frac{1}{2} \sqrt{4(\alpha^2 + 3) - (\sqrt{3})^2} = \frac{1}{2} \sqrt{4\alpha^2 + 9}$$

(2) 四面体 CDPQ の体積を V とする。 $\triangle CDP$ を底面とみると

$$V = \frac{1}{3} \times \triangle CDP \times CQ = \frac{1}{3} \left(\frac{1}{2} \sqrt{3} \sqrt{3} \right) \alpha = \frac{1}{2} \alpha \quad \text{一方で、} \triangle DPQ \text{ を底面とみると、}$$

$$V = \frac{1}{3} \times \triangle DPQ \times CK = \frac{1}{3} \left(\frac{1}{2} \sqrt{4\alpha^2 + 9} \right) h = \left(\frac{1}{6} \sqrt{4\alpha^2 + 9} \right) h$$

$$\text{したがって、} \frac{1}{2} \alpha = \left(\frac{1}{6} \sqrt{4\alpha^2 + 9} \right) h \Leftrightarrow h = \frac{3\alpha}{\sqrt{4\alpha^2 + 9}}$$



3

- (1) 出る目の最大値が5以下となるのは、 n 回とも5以下の目が出るときである。したがって、このようになる確率は

$$\left(\frac{5}{6}\right)^n$$

- (2) 「出る目の最大値が5である事象」は、「 n 回とも5以下の目が出る事象」から「 n 回とも4以下の目が出る事象」を除いたものに一致する。したがって、このようになる確率は

$$\left(\frac{5}{6}\right)^n - \left(\frac{4}{6}\right)^n = \left(\frac{5}{6}\right)^n - \left(\frac{2}{3}\right)^n$$

- (3) (2)と同様に考えて、「出る目の最大値が5であり、かつ最小値が3以上である事象」は、「 n 回とも3,4,5のいずれかの目が出る事象」から、「 n 回とも3,4のいずれかの目が出る事象」を除いたものに一致する。したがって、このようになる確率は

$$\left(\frac{3}{6}\right)^n - \left(\frac{2}{6}\right)^n = \left(\frac{1}{2}\right)^n - \left(\frac{1}{3}\right)^n$$

- (4) 「出る目の最大値が5であり、かつ最小値が3である事象」は、
 「出る目の最大値が5であり、かつ最小値が3以上である事象」……① から、
 「出る目の最大値が5であり、かつ最小値が4以上である事象」……② を除いたものに一致する。ここで、事象①の確率は、(3)より $\left(\frac{3}{6}\right)^n - \left(\frac{2}{6}\right)^n$

同様にして、事象②の確率は $\left(\frac{2}{6}\right)^n - \left(\frac{1}{6}\right)^n$ である。したがって、求める確率は

$$\left(\frac{3}{6}\right)^n - \left(\frac{2}{6}\right)^n - \left\{ \left(\frac{2}{6}\right)^n - \left(\frac{1}{6}\right)^n \right\} = \left(\frac{1}{2}\right)^n - 2\left(\frac{1}{3}\right)^n + \left(\frac{1}{6}\right)^n$$

- (5) 出る目の積が15で割り切れるための条件は、出る目の積が3で割り切れ、かつ5でも割り切れることである。そこで、「出る目の積が3で割り切れる事象」を A 、「出る目の積が5で割り切れる事象」を B とすると、求める確率は、事象 $A \cap B$ の確率 $P(A \cap B)$ である。
 一般に、余事象の確率やド・モルガンの法則、和事象の確率から、次が成立する。

$$\begin{aligned} P(A \cap B) &= 1 - P(\overline{A \cap B}) = 1 - P(\overline{A} \cup \overline{B}) \\ &= 1 - \{P(\overline{A}) + P(\overline{B}) - P(\overline{A} \cap \overline{B})\} \\ &= 1 - P(\overline{A}) - P(\overline{B}) + P(\overline{A} \cap \overline{B}) \quad \dots\dots ③ \end{aligned}$$

($\overline{A \cap B}, \overline{A}, \overline{B}$ は、それぞれ $A \cap B, A, B$ の余事象を表す。) ここで、 \overline{A} は「出る目の積が3で割り切れない事象」を表すが、「出る目の積が3で割り切れない」ための条件は、「出る目が、全て3で割り切れない」ことである。したがって、 \overline{A} は「 n 回とも1,2,4,5のいずれかの目が出る事象」に一致するので、その確率は $P(\overline{A}) = \left(\frac{4}{6}\right)^n$ である。

同様に考えて、 \overline{B} は「 n 回とも1,2,3,4,6のいずれかの目が出る事象」に一致するので、その確率は $P(\overline{B}) = \left(\frac{5}{6}\right)^n$ である。また、 $\overline{A} \cap \overline{B}$ も「 n 回とも1,2,4のいずれかの目が出る事象」に一致するので、その確率は $P(\overline{A} \cap \overline{B}) = \left(\frac{3}{6}\right)^n$ である。

これらを③に代入して、求める確率は

$$P(A \cap B) = 1 - \left(\frac{4}{6}\right)^n - \left(\frac{5}{6}\right)^n + \left(\frac{3}{6}\right)^n = 1 - \left(\frac{5}{6}\right)^n - \left(\frac{2}{3}\right)^n + \left(\frac{1}{2}\right)^n$$

4

(1) $x > 1$ のとき,

$$\begin{aligned} g(x) - f(x) &= \left(2 - \frac{1}{x}\right) - (-x^2 + 3x - 1) = \frac{(2x - 1) + (x^3 - 3x^2 + x)}{x} \\ &= \frac{x^3 - 3x^2 + 3x - 1}{x} = \frac{(x - 1)^3}{x} > 0 \end{aligned}$$

よって, $f(x) < g(x)$

(2) $b_{n+1} = g(b_n) = 2 - \frac{1}{b_n}$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) より,

$$b_2 = 2 - \frac{1}{b_1} = 2 - \frac{2}{3} = \frac{4}{3}, \quad b_3 = 2 - \frac{1}{b_2} = 2 - \frac{3}{4} = \frac{5}{4}, \quad b_4 = 2 - \frac{1}{b_3} = 2 - \frac{4}{5} = \frac{6}{5}$$

以下, 全ての自然数 n で $b_n = \frac{n+2}{n+1}$ …… ① が成立することを, n についての数学的帰納法で証明する。

[I] $n = 1$ のとき, $b_1 = \frac{3}{2} = \frac{1+2}{1+1}$ より①は成立する。

[II] k を自然数とし, $n = k$ のとき①が成立すると仮定する。このとき $b_k = \frac{k+2}{k+1}$ なので,

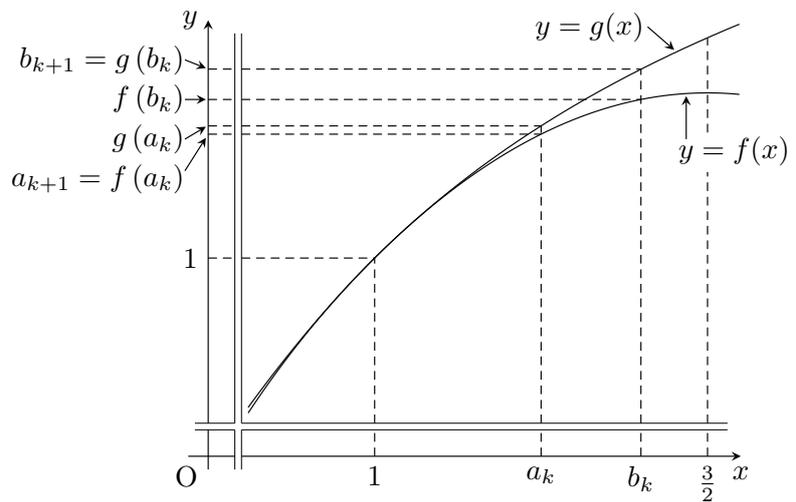
$$b_{k+1} = g(b_k) = 2 - \frac{1}{b_k} = 2 - \frac{k+1}{k+2} = \frac{k+3}{k+2} = \frac{(k+1)+2}{(k+1)+1}$$

よって, $n = k + 1$ のときにも①は成立する。

[I], [II] から, 数学的帰納法により, 全ての自然数 n で $b_n = \frac{n+2}{n+1}$ が成立する。

(**4** の解答は, 次ページに続く)

4 (前ページの続き)



(3) まず, $f(x) = -x^2 + 3x - 1 = -\left(x - \frac{3}{2}\right)^2 + \frac{5}{4}$ より, $f(x)$ は $1 \leq x \leq \frac{3}{2}$ で単調増加である。

以下, 2 以上の全ての自然数 n で $1 < a_n < b_n$ が成立することを, n についての数学的帰納法で証明する。

[I] $n = 2$ のとき, $a_2 = f(a_1) = f\left(\frac{3}{2}\right) = \frac{5}{4}$ また, (2) より $b_2 = \frac{4}{3}$

$1 < \frac{5}{4} < \frac{4}{3}$ なので, $1 < a_2 < b_2$ は成立する。

[II] k を 2 以上の自然数とし, $1 < a_k < b_k$ が成立すると仮定する。このとき,

(2) より $b_k = \frac{k+2}{k+1} \leq \frac{3}{2}$ なので, $1 < a_k < b_k \leq \frac{3}{2}$

$f(x)$ は $1 \leq x \leq \frac{3}{2}$ で単調増加なので,

$$f(1) < f(a_k) < f(b_k) \Leftrightarrow 1 < a_{k+1} < f(b_k) \dots\dots \textcircled{2}$$

が成立する。

また, $b_k > 1$ なので, (1) より $f(b_k) < g(b_k) = b_{k+1} \dots\dots \textcircled{3}$ が成立する。

②, ③より $1 < a_{k+1} < f(b_k) < b_{k+1}$ となるので, $1 < a_{k+1} < b_{k+1}$ が示された。

[I], [II] から, 数学的帰納法により, 2 以上の全ての自然数 n で $1 < a_n < b_n$ が成立する。

(4) (3) より $1 < a_n < b_n$ ($n \geq 2$) である。また, (2) より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} b_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n+2}{n+1} = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n+1}\right) = 1$$

となる。よって, はさみうちの原理から $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 1$

5

(1) 点 w が「点 1 を中心とする半径 1 の円の内部で中心以外」にあるための条件は、

$$0 < |w - 1| < 1 \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

である。 $w = \frac{z+i}{z-i}$ を①に代入して、

$$0 < \left| \frac{z+i}{z-i} - 1 \right| < 1 \Leftrightarrow 0 < \left| \frac{2i}{z-i} \right| < 1 \Leftrightarrow 0 < \frac{|2i|}{|z-i|} < 1 \Leftrightarrow 2 < |z-i|$$

したがって、 z は、 i を中心とする半径 2 の円の外部を動く。(答の図はこのページの下)

(2) 点 $w = \frac{z+i}{z-i}$ が「原点を始点とする偏角 $\frac{\pi}{3}$ の半直線上 (原点を含む)」にあるための条件

は、ある 0 以上の実数 r を用いて $\frac{z+i}{z-i} = r \left(\cos \frac{\pi}{3} + i \sin \frac{\pi}{3} \right) \dots\dots \textcircled{2}$ と表せること

である。 $z = x + yi$ (x, y は実数) とすると、

$$\frac{z+i}{z-i} = \frac{x+(y+1)i}{x+(y-1)i} = \frac{\{x+(y+1)i\}\{x-(y-1)i\}}{\{x+(y-1)i\}\{x-(y-1)i\}} = \frac{(x^2+y^2-1)+2xi}{x^2+(y-1)^2}$$

なので、

$$\textcircled{2} \Leftrightarrow \frac{(x^2+y^2-1)+2xi}{x^2+(y-1)^2} = \left(\frac{1}{2} + \frac{\sqrt{3}}{2}i \right) r \Leftrightarrow \begin{cases} \frac{x^2+y^2-1}{x^2+(y-1)^2} = \frac{1}{2}r \\ \frac{2x}{x^2+(y-1)^2} = \frac{\sqrt{3}}{2}r \end{cases}$$

ここで、つねに $x^2+(y-1)^2 \geq 0$ なので、このような 0 以上の実数 r が存在するための条件は、

$$x^2+y^2-1 = \frac{1}{\sqrt{3}} \cdot 2x \dots \textcircled{3} \quad \text{かつ} \quad 2x \geq 0 \dots \textcircled{4} \quad \text{かつ} \quad x^2+(y-1)^2 \neq 0 \dots \textcircled{5}$$

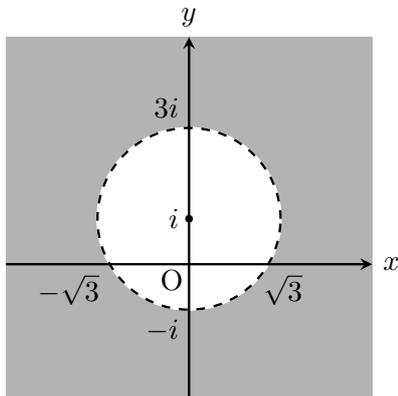
である。ここで、

$$\textcircled{3} \Leftrightarrow \left(x - \frac{1}{\sqrt{3}} \right)^2 + y^2 = \frac{4}{3} \Leftrightarrow \left| z - \frac{1}{\sqrt{3}} \right|^2 = \frac{4}{3} \Leftrightarrow \left| z - \frac{1}{\sqrt{3}} \right| = \frac{2}{\sqrt{3}}$$

$$\textcircled{4} \Leftrightarrow x \geq 0$$

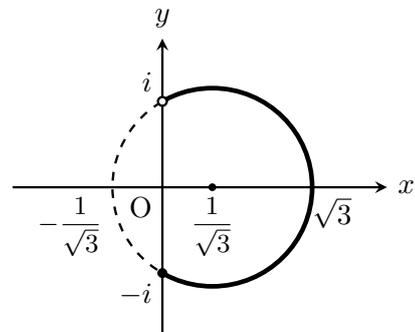
$$\textcircled{5} \Leftrightarrow (x, y) \neq (0, 1) \Leftrightarrow z \neq i$$

なので、 $z = x + yi$ が描く図形は、「点 $\frac{1}{\sqrt{3}}$ を中心とする半径 $\frac{2}{\sqrt{3}}$ の円のうち、実部が 0 以上で、かつ $z \neq i$ の部分」である。



上の図の色付き部分 (境界線は含まない)

(1) の答



上の図の太線部分

(ただし、 $-i$ は含むが、 i は含まない)

(2) の答